

フランソワ・ヴィヨン『フラン・ゴンチエに返歌のバラッド』に見る文学的背景

佐藤 恵

序として—作品の内と外

ヴィヨンの『遺言』（*LE TESTAMENT VILLON*, édité par Jean RYCHNER et Albert HENRY, T. L. F., LIBRAIRIE DROZ, S. A. GENÈVE 1974, I TEXTE. 以下、『遺言』と略記）が内に持つひとつの側面として、漸進的に進行していくそれ自体で完結した精神のドラマを読み取ることはできる。語り手でもありながらひとりの登場人物としての位置を与えられた「私」或いは「哀れなヴィヨン」の、怨恨の念が紆余曲折を経つつその「死」によって昇華するに至る。この物語は殆ど一貫して『遺言』の底流を成す。

作者フランソワ・ヴィヨンの生涯については、有力な反証のないために『形見』（*LE LAIS VILLON*, édité par Jean RYCHNER et Albert HENRY, T. L. F., LIBRAIRIE DROZ, S. A. GENÈVE 1977, I TEXTE. 以下、『形見』と略記）『遺言』に見られる断片的な記述にもとづいて研究がなされてきた。先行する諸研究を集成し、凌駕する歴史的な視点を示した P. シャンピオン、これに殆ど意を同じくしながらも詩人の内面を洞察することに主眼を置いた佐藤輝夫、加えて近年の作品研究を考慮しつつ古文書学から改めて成果を提出した J. ファヴィエ、以上のいずれの研究者にしてもこの単純な前提から出発するよりないということでは共通している。彼らの拠る前提は、作品を中心に考えるならば、ヴィヨン詩の内と外を繋ぎあわせる結び目と見なされ得る事項に他ならない。しかし、だからといって『遺言』の底流をかたちづくる物語自体を、本来作品の外にあるべき作者の個人的体験と全く同一視することはできない。作品の内と外を混同することなく理解を進めていこうとするなら、伝記研究が例外なく行わざるを得ない推理に対してもやはり作品そのものをとおして検証すべきであろう。

『遺言』は一気に書き下ろされた作品ではなく、その冒頭でことわられているように1461年に書き始められたとしても、先立つ数年間の制作による部分を幾つか含んでいる。本論文で扱う『フラン・ゴンチエに返歌のバラッド』¹⁾（以下、引用文中以外では『返歌』と略記）についても、1457年から59年の間の制作になる作品と目される。²⁾ 作者が『形見』を書き上げたのちにアンジェを訪れようとしていたこと、³⁾ 当時のアンジェはルネ・ダンジュの拠点のひとつであったことを根拠に、伝記研究では、

同時代のふたりの詩人、ヴィヨンとルネ・ダンジュの結局果たされなかった会見の影響を重く見る傾向が強い。⁴⁾

一般に『遺言』に於いて、或るバラッドの前の八行詩の数詩節は、韻律的にというより主題的に、バラッドと関係づけられている。⁵⁾バラッドを「遺贈」される名宛人と、詩人の関係を表すものとしても読まれ得るので、こうした数詩節は、バラッドの制作された状況、ともすれば作品が受容された場を暗示する手掛かりとなる。例えば『返歌』の前に置かれた、「『フラン・ゴンチエに返歌のバラッド』をアンドリ・クーローに贈る」⁶⁾といった詩行を、そのまま『返歌』の内容に関連させると、詩人ヴィヨンとルネ・ダンジュとの関係が浮かび上がるかのようである。アンドリ・クーローは、ルネ・ダンジュのバリーに於ける代訴人であり、ヴィヨンとも親しい間柄であることからヴィヨンに紹介状を依頼されたのではないとも言われている。⁷⁾当時ルネ・ダンジュは自ら詩人として名声を保っていたのみならず、芸術家の理解者かつ擁護者としても高名であった。このバラッドの制作の動機を考察して、ルネ・ダンジュに対する結果的な失望と表裏をなしていたであろうヴィヨンの期待感と詩人としての矜持⁸⁾を読み取ることは、伝記研究として最も深い洞察を示したものとすら言えよう。

ルネ・ダンジュは、1450年代の詩作や行動から知られるように、宮廷風恋愛を描いた文学作品に執心していたが、これと同様に、田園生活を描写したフィリップ・ド・ヴィトリ(1285/95-1361)の作品にも傾倒していた。このことを考慮に入れるなら、ヴィヨンの『返歌』も、ルネ・ダンジュの宮廷の雰囲気なくしては成り立たなかったであろうことに異論の余地はない。しかし前掲の 3氏による、飽くまでも『遺言』という作品を、詩人の個人的な経験の反映とする推測を見比べてみても、実際にふたりの詩人が会見した可能性は高いが根拠は薄い。一方、作品が他の文学作品との間に持った関わりを重視するなら、数々の引用、パロディの確認されているヴィヨン詩のうちでも、このバラッドでは、パロディ化された対象が明示されており、作者の態度のありようも鮮明である。特に読者、批評者としてのヴィヨンの側面を考察するにあたって、また同時代の文学的状況の一端を知るためにも顕著な例と思われる。

そこで、ヴィヨンの『返歌』に隠された伏線として、ひいては『遺言』の語る伝記上のひとこまとしてルネ・ダンジュとの関係を想定することを本論文では措き、直接作品に表れたフィリップ・ド・ヴィトリの『フラン・ゴンチエの唄』⁹⁾、これに深く関わりヴィヨンに先立って書かれたピエール・ダイイ(1351-1420)による返歌『暴君の生の如何に悲惨であるか』¹⁰⁾、この2篇(本論文末に『返歌』と併せ、全文を掲げる)との関係をまず内容面から、ついで用いられた語りの手法の面から考えていきたい。以下の考察では便宜のため、ド・ヴィトリ、ダイイ、ヴィヨンの作品を制作年代順にそれぞれA、B、Cと呼ぶことにする。作者の生没年より、Aは14世紀半ば、Bは15世紀初めの作と推測され、Cの制作は前述のように1457-59年の間と見なしている。

1. 「物語内容」に関して

a. 農夫と暴君

15世紀に入って、ピエール・ダイイによる『暴君の生の如何に悲惨であるか』（B）が、ド・ヴィトリの『フラン・ゴンチエの唄』（A）と、対にして読まれるようになっていたということが指摘されている。¹¹⁾ この田園生活と宮廷生活をそれぞれに主題とした2篇の作品を対照させて読むことで、ド・ヴィトリの描いた田園生活は、万人に向けて理想を掲げるといよりも、謀略や戦争に疲れた貴族の憧れの対象という色合いをつよめる。ルネ・ダンジュの田園趣味も、ダイイとド・ヴィトリの二幅対となった作品に感情移入した結果だといえよう。こうした趣味のありかたは、ド・ヴィトリからも更に遡って、ロマネスク芸術に見られるような、世俗的現実の象徴化を志向している。

農夫を主人公に置きその生活を描いているからといって、現代人が当然想起する労働から来る疲労や、実体験に基づく描写などが、ド・ヴィトリの作品に書き込まれているという訳ではない。

◁Devant thirant, ne genoil qui s'y ploye. (A, v. 24)

ゴンチエは、宮廷生活に於いて経験されるような世俗的な気遣いや、暗殺に対する恐れ、出世欲や過度の情欲に対して無知であるがゆえにフラン、即ち「自由な」人間であり得るのであり、この「自由」は決して彼自身によって見出だされるものではない。「ひとのひれ伏す暴君の前で跪くことはない」のは、宮廷に出仕する必要もなく経験もないからで、それ以上の意味はない。どこからともなしにこの独言を聞く、詩の語り手にとっては、確かにこうした必要のなさ、経験のなさが物語る、宮廷との無縁さそのものが、ほとんど驚異と映っているのだが。

その驚きを示すように作品は以下のように結ばれている。

Lors je dy: <Las! serf de court ne vault maille,
Mais Franc Gontier vault en or jame pure.>(A, vv. 31-2)

語り手の賛嘆は、ゴンチエ自身の知らない宮廷人との比較から発せられている以上は、本来ゴンチエとは無関係な場所から発せられていると言ってもよい。おそらく、ド・ヴィトリが重きを置いた点は、ゴンチエの無知に守られた節制の徳が充足感を伴って存在することにある。この無知は、それを「無知」として相対化する視点、即ち自身は「知っている」視点をもってして初めて存在し得るのであり、この視点なくし

ては、清貧から生ずる満足感も、欲望の達成にともなう充足感と異なるところはない。

オヴィディウスを手本にしつつ宮廷で一種の夢幻劇として特殊な進化を遂げた田園詩 *pastorale*¹²⁾ の、ジャンルとしての限界がここに見られる。田園詩の感興は、田園とは異なった世界、例えば宮廷に生きるひとびとには存在するが、田園そのものや農夫そのものの内面とはほとんど関係ない。だから田園詩としての伝統にもとづいた A に於いては、農夫であることの固有の意味が求められるというよりは、宮廷人の逆説的意味を持った存在として農夫という職業が扱われている。田園の生活情景を描きつつ、清貧を体現し、且つ宮廷には見られない理想の人物像が追及されているのである。

後段でくわしく述べるように A の語り手を流用した態のダイイの作品では、A に於ける価値観、即ち清貧、無欲を理想とする姿勢も踏襲されている。但し、B の場合には主人公は暴君、A と B に共通する価値観の中でフラン・ゴンチエの対極に位置する人物である。ド・ヴィトリの描いた農夫に対照される役割を、造型された最初から担っているこの人物は、多少現実の観察にもとづいているのではないかとも思われるが、宮廷人の逆説としてのゴンチエの、そのまた陰画として、現実の宮廷人の二重の反転を経た姿である。

のどかな風景の中で、澄んだ泉のほとりに据えた「移動小屋」に妻エレヌと住まい、手製のチーズや果物などの「自然の賜物」を食べるゴンチエに対し、暴君は、荒寥とした風景の中で、切り立った岩の上に聳える居城の「高み」に座して、酒にも様ざまの肉や肴にも不自由しない。宮殿の豪華な部屋で歌やダンスの娯楽にも事欠かず、まさに、妻とともに手仕事に精を出すことで日々を過ごすゴンチエには考えも及ばない暮らしが、暴君の周囲を取り巻いている。ところが本人は、物質面での豊かさから想像されるような満足感などまるで持っていない。

Pour tous ses biens en soy n'a lie chiere. (B, v.19)

「その全ての富をもってしても喜ぶ顔すらしない」暴君は次のような独白をもらすゴンチエと対照的である。

<Labour me paist en joieuse franchise;(A, v.28)

A に於けるゴンチエの「自由」は、飽くまでも宮廷の暮らしの不自由さを前提として考えられるものでありながら、同時に「労働」を苦しみでなく自発的に求めるべき喜びに擬するという思想にも支えられている。この思想は結局は豊かさに対する無知に因るのだが、ゴンチエを理想の人物像として造型するには大きな要因となっている。

B の暴君という陰画を得て、ゴンチエのような節制の体現者に対する驚嘆は微妙に

変質する。Aでは、自ら何者であるかを語らず、登場人物の生活を俯瞰するかのよう
な神の視点を持った語り手がゴンチエに対置されていたに過ぎないが、Bでは、詩の
登場人物としてゴンチエに等しい具体性を備えた暴君の存在からも、農夫の無垢が照
射されることになる。暴君はゴンチエの知らない宮廷を住みかとし、AとBの2篇が
かたちづくる世界のうちで知らないものを持たないにも関わらず、内心の安息は得ら
れず、「宮廷よりもゴンチエの暮らしのほうがよい」と嘆ずる。

AをBとの二幅対としてみると、食欲さや欺瞞といった悪徳と物質的な豊かさが並
存する不均衡が、徳と貧しさの並存というもうひとつの不均衡に対置されている構図
が浮かび上がる。Aが単独で読まれるときに主眼と映るゴンチエの「自由」すなわち、
節制が精神的な充足を与えているという自律性は、むしろ後退している。

グアイがド・ヴィトリに返歌を書くことによって、Aの主題であるゴンチエの充足
感の不思議さという点は、精神的な富と物質的な富の不均衡という、より普遍化され
た問題の一部を成す要素となっている。

ふたりの描く農夫と王侯の生活は、いずれも既に宿命として課されたかのように
あり、生活の細部も、時によって変化するというよりも、むしろ変わりようがないこと
を強く印象づける。これらの作品では登場人物の行為や生業は、変わりようのない日
常によって構成される以上、登場人物自体も、理想の人物像であるとか、非道の見本
といった普遍性を必然的に担うことになる。

b. 聖職者の登場

ヴィオンが『フラン・ゴンチエ』に返歌を書いたのは、既に二幅対となっていた、
農民と王侯との生活情景に更に聖職者の一幅を付け加えようとする意図からではない
かと考えられる。これによって11世紀以来の3つの社会階層が揃うことになる。しか
し描かれている情景そのものは、理想化されたというよりは故意に誇張された安楽な
暮らしであり、現実の聖職者階級を風刺する結果になっている。またヴィオンの作品
に現れる教会参事会員¹³⁾は、聖職者階級を歴史的にかたちづくってきた修道士とは
異なる側面を明らかに持っている。

ヴィオンのバラッドの主人公に教会参事会員を指す *chanoine* が選ばれていること
には幾つかの理由が挙げられる。まず田園生活を描くド・ヴィトリの作品に対して都
市生活を体現する人物として、教会参事会員が選ばれていることが考えられる。教会
参事会は司教を頂く司教座聖堂に付属した機関であるため、パリのような都市では地
方都市よりも比較的早くから、その権能を発達させている。同じ聖職者であっても世
俗を離れて生活していた、律修参事会の構成員となる修道士とは違って、教会参事会
員は清貧、貞潔、服従といった誓願を公に立てることを義務づけられていない。教会
参事会制度そのものは11世紀後半頃から存在したもので、構成員の「使徒的生活」を

目的としている。清貧などの誓願を立てなくともよいとは言え、教会参事会員はまず司祭職についており、聖務日課を共唱すること、私有財産の放棄と財産の共有を守ることがその務めとされる。ここで言う「財産の共有」は、会員が或る教会の司祭職にある場合に、その教会ないしそこから得られる利得が会員のものとならず、参事会の所有となることを言う。

制度が設立された当初から時を経るうちに、こうした教会参事会の目的や義務が建て前と化し、プライドや利権をめぐる参事会同士の争いが見られたりして14、15世紀にはかなり実態が変化していたであろうことは充分予想される。フランソワ・ヴィヨンの育った場所とされる「赤門の家」界限も、長くサン・ブノワ教会とノートル・ダム寺院、両参事会の影響下にあった¹⁴⁾ので、教会参事会員は身近で、幼い時分から見聞したことによって造型しやすい主人公であったかもしれない。

またテュアーヌはヴィヨンの作に類似した主題を持つ詩として、ユスタシュ・デシャンの14世紀末か15世紀初めの作と思われるバラッドを挙げている。¹⁵⁾

デシャンは、「この世のあらゆる生業を見て思うに、」¹⁶⁾という書きだしから、武人、僧侶 cleric、資産家、貴人のいづれにも全き安息はないとし、ルフラン「こんにち教会参事会員ほどの暮らしはない」¹⁷⁾に至る。ヴィヨンやド・ヴィトリに見るような、各階層の生活について細部にわたる描写はないが、それはデシャンの主眼が「あらゆる生業」にあるひとびとの、それぞれの移ろい易さを語ることにあるからで、そうした運命の変転に対する悲嘆なくしては、「こんにち」安定している教会参事会員への羨望も皮肉もない。デシャンのバラッドでは、「従軍する者は、すぐに殺され、僧侶は深慮して身を滅ぼし、富める者は安らかではいられない。」¹⁸⁾といった簡潔な表現に当時の世相が垣間見える。

「歌いながらに彼らのパンは手に入り、然るべき所で、苦勞ひとつしなないであろう、食器台は金と金メッキの銀、よい生地を身に付け、たっぷりと着込むだろう…¹⁹⁾」と、ここに描かれた教会参事会員の羽振りの良さには多少の誇張はあるとしても、シャルル6世のもとでジャーナリスト的な役割も果たしていたというデシャンの観察眼のありようも窺われ、²⁰⁾ 教会参事会員の实像を浮かび上がらせるものとなっている。すべては移ろいゆく、という無常観と、現実に対する観察の確かさという点では、デシャンとヴィヨンの資質には似通ったものがある。ヴィヨンが実際にこの作品を知っていたかどうかは不明だが、戦争や疫病で疲弊した社会の中で、共同の収入源を守り厳しい労働に従事することもない教会参事会員が、安定した生活を送っていたことは異例と映ったとして不思議はない。

もちろんヴィヨンのバラッド冒頭に登場する教会参事会員は、現実離れた感を起こさせるほどに戯画化されている。身边の細部や行為を列挙する、この手法はド・ヴィトリがゴンチエを登場させたやりかたを、いわば集約させたかたちで逆手にとっているのだが、本来田園詩という夢幻劇の世界の住人であるゴンチエ、或いはダイイの

暴君の相手として、この聖職者を描写するためにヴィヨンは幾つかの仕掛けを行っている。

聖職者のかたわらに待る「シドワヌ」、彼らが飲む「イポクラス」といった語は、それらの語彙を日常的に使う階層を暗示するという点で、ド・ヴィトリの行う食品の列举に匹敵し得る。またAでは描かれた生活の場面が食と労働に限られ、Bでは食と娯楽であるのに対して、Cでは性の場面のみに絞られる。場面をより限定することによって、敢えて一面的で日常を逸脱したイメージを提示する結果となっている。戯画化された像ではあるが、聖職者或いは教会参事会員のおそらくは隠された実態の一端を表現していると読者に予想させることによって、ゴンチエ、暴君のイメージに比肩し得る、聖職者階層の典型が造型されている。

ヴィヨンに於けるド・ヴィトリ、ダイイとの内容上の決定的な相違は、倫理の問題の有無にある。聖職者が娼婦を買う行為は中世を通じて、必要悪として黙認されつつも倫理的な問題であり続けた。²¹⁾ つまりヴィヨンの造型した一場面は、逆らい難い魅力を持つ行為が、どこか後ろめたさをとめないながらも、実現されている現場であり、このような行為には、相応の理由が想定される。

Lors je congneuz que, pour dueil appaisier,

Il n'est tresor que de vivre a son aise. (C, vv.1481-82)

ミュスは、「苦しみを宥めるため」の「苦しみ」が、ヴィヨンにはあるが、ゴンチエにも、ド・ヴィトリにも欠けており、ヴィヨンの『返歌』は彼に固有のリアリズムによって、ド・ヴィトリに應えるどころかかえってド・ヴィトリの無垢を際立たせる結果になっていると言う。²²⁾ おそらく作者同士の違いはヴィヨンによっても意識されていただろう。確かに、王侯の憧憬の的として作られたゴンチエの住む世界には、苦しみはあり得ない。だがもし、デシャンのように「あらゆる生業」のひとびとを想定し、ゴンチエやダイイの暴君もそのひとりとして考えるなら、「苦しみを宥めるためには、楽に生きる」ことを、場合に応じて必要でもある「宝」とするヴィヨンの思想は、「あらゆる生業」のひとにとって有効となる。「楽に生きる」ことは倫理を侵すことでもあり得るが「苦しみ」から逃れるための方便であり、ヴィヨンはド・ヴィトリやダイイが問題とするような、宿命として課された不変の日常の是非を言っているのではない。

ド・ヴィトリ、ダイイの両作品では、「フラン・ゴンチエ」の質素から生ずる無垢という精神的な富に、「暴君」の宮廷に於ける貧困な精神に支えられた豪華な物質的富が対比されている。こうした精神面と物質面との対立の構図はヴィヨンに於いては既に無効となっている。精神的な富、すなわち美德は問題とされず、物質的な充足が精神上の満足に置き換えられ得るような世界が描出されている。

II. 語りの視点に関して

a. ダイイによる「返歌」

ヴィヨンのバラッドの題となっている『返歌』contreditzが実際に持っている意味合いに即し、従来この語は「反駁の歌」（鈴木信太郎）「駁して歌へる」（佐藤輝夫）と訳されている。ヴィヨンの用法では「反駁」les contre-affirmations の意味合いが濃い、彼の同時代では逆に「模倣して詠む」la réplique à . . . の意を取る方がむしろ通例であり、²³⁾ この意に沿ったダイイの作品を指す場合にもcontreditzの語が標題として使われる場合もある。²⁴⁾ ヴィヨンがド・ヴィトリと対をなすダイイの作品を意識していたとすれば、contreditzに独自の意味を付加しようとした動機も充分考えられる。つまり、同じ語を別の意味合いに用い、旧来の意味との隔たりに感興を見出だそうとした意図が、ヴィヨンの場合には想定できる。そこでここでは敢えて「反駁」の意味では訳さず、ダイイの作品とともに「返歌」とした。

BをAと対照してみると、「返歌」という作品のありかたを或る程度規定することが可能である。この2作品は語彙の面で非常に似通ったものがあり、ダイイがド・ヴィトリの作を実際に目の前にしつつ詩作を行ったのではないかと考えられる程である。まず語彙の類似を幾つか例示すると、例えばAに於いて

<Car jusques la ne m' esprent convoitise, (A, v.26 下線筆者、以下同)

このような表現はBでは以下のように、語根を同じくする語を用いて対応される。

Serve et subgitte par convoiteuse ardure. (B, v.8)

Car tant convoicte, tant quiert et tant desire (B, v.22)

Aの名詞「羨望」convoitiseが、Bでは形容詞convoiteuse、動詞 convoitier のかたちをとり2度現れている。こうした対応は上に示したAのesprendreについても見られ、こちらは他の例で下に引用する詩行に過去分詞 esprise (B, v.15) として1度用いられている。

他に、Aに於いて lescherie, gloutirの語の使われる詩行は次の如くである。

<Ambition, ne lescherie gloute. (A, v.27)

lescherie については同じ名詞で

Comment sa bouche, de lescherie esprise, (B, v.15)

またgloutir の場合は 2とおりの名詞が見られる。

Le mal glouton par tout guette et advise (B, v.13)

Que poursuivre par orde gloutonnie (B, v.31)

A B間の語彙上の関連は以上のような対応関係に見てとれる。ここに挙げた、「羨望」convoitise, 「淫楽」lescherie, 「飲み込む, 心をとらえる」意を持ち, 名詞化すると「欲張り」「強欲さ」の意味になるgloutir, この3語がA, Bに現れるそれぞれの文脈を見ると, Aの主人公ゴンチエからは排除されている要素がBの主人公暴君の属性となっていることがわかる。

こうして, ゴンチエに於いてはド・ヴィトリが意識的に排除した性格を, はぼそのまま引き受けるかたちでダイイは暴君を造型している。このためにゴンチエと暴君のふたつの像は対照的であるとともに相互補完的でもあるのだが, それはゴンチエの多少矛盾したものの言いにも原因がある。

<Ne scay>, dit-il, <que sont pilliers de marbre, (A, v.19)

ゴンチエは木を伐りつつ, 彼の生活を確かなものとしてくれる神に感謝してこのように, ひとりに呟く。この言葉を皮切りに12行にわたって独言が続くのだが, ミュスの指摘にもあるように, ²⁵⁾ ゴンチエは自分が口にしていながらそれが何なのか解らないのである。ド・ヴィトリはゴンチエを造型する際に, 「緑の葉陰, 芳しい草の上」(A, v.1) 「出来立てのチーズ, 牛乳, 風味をつけたバター」(A, v.5) といった, 身の事物を描出するだけでなく, その内面を独言というかたちで描写しようとして, 独言を発する人物, ゴンチエの視点を安定させることに関しては失敗している。ゴンチエの独言は, 「知らない」と言う視点の他に, 「大理石の柱」(A, v.19) や「良い見掛けの裏に隠された裏切り」(A, vv.21-2) を実は知っているもうひとつの視点を含んでいる。「宮仕えには一文の値もない, まことフラン・ゴンチエは黄金に嵌った宝石に値する。」(A, vv.31-2) と嘆ずるこの作品の語り手の視点である。ゴンチエの独言には, だから知識の欠如をとりたてて言うことによってかえって知識そのものの存在を予想させてしまうような不安定さが潜んでいる。

ダイイの「返歌」は, こうしたゴンチエの独言に於ける視点の不安定さを明確にはとらえ得ないところで成り立っている。「知らない」と言う人物に「知っている」と

言う人物を補完的に対置させるといふ、ダイイの「返歌」のありかたは、ド・ヴィトリの作品の示す、語り手と登場人物の関係を裏切るところなく補強する。

Ung chastel sçay, sur roche espoventable, (B, v.1)

ダイイの作品に於けるこの語り手が、先に挙げたゴンチエの科白「私は知らぬ」に対応し、ゴンチエに感嘆するAの語り手に共通する視点から発していることは言うまでもない。A、Bの両作品ではひとつの視点を持つ語り手が共有されている。ダイイはド・ヴィトリの作品の語り手を再度用いつつ、「ゴンチエ」と対照的な人物「暴君」とその生活を描くことで「返歌」としている。そして宮廷生活よりはゴンチエのような暮らしの方が価値があるとして、ド・ヴィトリと同じ結論に達しているのである。描写された内容こそ対照的だが、同じ視点をもってして結局同じ結論を引き出しているという点に、ダイイに於ける「返歌」のありようが伺える。

b. ヴィヨンによる『返歌』

A、Bに共通する語りの視点が、例えば誰に話すでもないゴンチエの独言を聞き取り、居城で笑うことなくもの思いに沈む暴君の姿を垣間見ることでもできる、いわば神の視点であるとすれば、Cの語りはこれと対照的に、見聞と経験の限定された地上の視点にもとづくと言えよう。語り手と登場人物の視点の混同が見られるド・ヴィトリにとっても、またその視点を流用したダイイにとっても、作品中でどういった語りの視点を採用するかという問題は、1-bで参照したデシャンとも同様に、如何に限なく対象を映し出す鏡を創出するかという問題と同義であるように思われる。しかしCの語りの視点を表す「私」は、詩の語りを司ると同時に、第1詩節に現れた教会参事会員に等しい比重を持つ登場人物としてかたちづくられている。

Les vy tous deux par ung trou de mortaise. (C, v.1480)

第1詩節の末尾3行目で最初に、語り手の所在は明らかとなるが、「ほぞ穴」を通して覗き見る視点から、聖職者の生活のひとこまが語られていたことがここで了解される。ゴンチエや暴君の暮らしが、その住まいを取り囲む風景から語り起こされてゆくのは違って、教会参事会員の場合には普段の住居や、生活が読者には一切知らされない。ここでは語り手の知覚は、街の或る場所のひとつの情景に絞られ、登場人物と語り手とは同じ地平に立ち、その間に覗き見る側と見られる側の関係があるに過ぎない。ゴンチエ、暴君をどこからともなく見守り、「ゴンチエの暮らしのほうがずっとよい」(B, v.29)という価値判断を下すBの語り手とCの語り手では、その視

点のありようという点で大きく異なっている。

Cに於いては、価値判断は飽くまでも読者に委ねられるかたちをとる。

S'il se vantent couchier soubz le rosier,
Lequel vault mieulx? Lit costoyt de cheze? (C, vv.1489-90)

ゴンチエの生活は「薔薇の木陰でやすむ」、教会参事会員の生活は「脇椅子付きのベッド」と、換喩的手法で言い換えられている。Cの第2詩節以降ではゴンチエの生活に見られるさまざまな具体的な事象をあげつらいながら、それぞれに反駁が加えられてゆくのだが、ド・ヴィトリの意図とは裏腹に、ゴンチエの内面はほとんど触れられないまま、「玉葱、青葱」(C, v.1485)や、「凝乳」(C, v.1487)、「大麦とからす麦の粗い黒パン」(C, v.1493)などでやはり換喩的にゴンチエの暮らしが点描されている。このような換喩的な表現は、Cの中にAの内容を縮約した姿で存在させ、Aとは別の視点から照射するために用いられている。Aでは、ゴンチエの住む場所や食物が語り手と共有し得るかどうかわからないが、Cの語り手は共有し得るという前提のもとに「どちらがよいか?」と問い掛ける。

Bが宮廷人よりも田園の農夫に徳を見出だすというAと共通の価値観に拠り、そこに疑いをはさむ余地を与えない「返歌」である以上、「どちらがよいか?」というCの語り手による問いは、読者を対象としながらも、A、Bの語り手双方に対して向けられたものと見ることができよう。

A tel escot une seulee journee
Ne me tendroient, non une matinee. (C, vv.1496-7)

「大麦とからす麦の粗い黒パンと、年中水を飲んでいる」(C, vv.1493-94)のをゴンチエの生活として前置きした上で、Cの語り手は「唯一日も私には我慢できないだろう、朝だけでも。」とする。ゴンチエの生活はCの語り手にとって単なる風景でなく、その身の上にもいつでも実現し得るかのようである。つまりCの語り手は、その視点を地上に持つと同様に、自ら食べたり飲んだりする肉体を備えていることになる。AやBに於いては語り手というよりむしろ登場人物の属性であるような性格を、Cでは語り手も担っている。そのために、教会参事会員の暮らしに対する視点、ゴンチエに対する視点はともにA、Bの語り手のような鳥瞰的な網羅性を失い限定されているがゆえに、登場人物たちにより近しく、感覚を共有し得る位置から語られた、迫真性を示す結果となっている。

少なくともA、B、Cの作品を比べて見る限りに於いては、登場人物の生活の全てを見渡すような網羅的な視点を持つことと、それぞれの生活の価値を判ずることとは

同じことであって、A、Bの語りはその両方を果たしている。

Cでは、

Se bien leur est, cause n'ay qu'il me poise, (C, v.1500)

ゴンチエの生活は「我慢できない」(C, v.1497)としながらも、「彼らがそれでよいなら、私が悩むこともない」と、敢えて否定しない態度をとっている。各々の生活に対する価値判断はCでは回避されている。なぜならルフランにあるように、「楽に生きるより宝はない」からであり、このルフランは第1詩節では、聖職者が娼婦を買うという倫理を侵す行為さえ許容する命題として現れ、第2詩節以降では「楽に生きる」ことは全ての階層のひとに、場合によってはゴンチエにも当て嵌まる。

『返歌』を制作するにあたって作者の関心は、ゴンチエと対照的な登場人物を描出することよりも、Aで提示され、Bによって共有された価値観に対して疑問を表明することにある。そのためには、Aと同様の語りの手法を用いてBのように反証を造型するのではなく、そこに用いられた語りが、その視点とともに疑われる必要がある。Cに於ける、登場人物により近い、限定された知覚を持った語り手の造型は、Bでは見られない視点でもってゴンチエを新たに照射することにもなっている。

ド・ヴィトリ、ダイイに見られるように、語りの視点は作品の内部に対しては、語られる内容の置かれた環境として、或る価値観によって登場人物を規定する枠組みとして機能する。その一方でヴィオンに現れているように、作品の外部、読者に対しては、価値観の方向付けを行うと同時に知覚を限定する役割をも担う。或る語りを採用することは、程度の差こそあれ、内容に関してはその環境を、読者に対してはその知覚の限定の度合いを選びとらせることになる。A、Bに於ける神の視点は、知覚の限定という側面を可能な限り隠置した上で成り立つ、ひとつの手法であると考えられ、ド・ヴィトリへの「返歌」を書くにあたって、ダイイはこの手法に対して当然意識していたと思われる。ヴィオンと異なるのは、ド・ヴィトリの手法を批判的ではなく肯定的に扱った点なのである。Cで採られた語りの手法は、A、Bの両作品では潜在するにとどまっている。限定された語りの視点を、地上の視点として露出させることによって固有性を打ち出している。登場人物の全てを鳥瞰的にとらえ、網羅する機能を失っているがゆえに、Cの語り手は登場人物により近接した感覚を備えた存在として、Aの語り手、或いは読者に向け「どちらがよいか？」と問い掛ける姿勢を得ている。この問いで新たに照射されることによって、Aで絶対的な価値を与えられた理想像は、「楽に生きる」ありかたのひとつとしてCの内に位置を占めることになる。

結びとして—ヴィヨン詩の新しさ

本論文で扱ったヴィヨンのバラッドは他の数篇の作品とともに、「形見」と「遺言」の制作の間に書かれている。「形見」を書き上げて、なお飽き足りない創作欲をもって固有のスタイルを模索した時期であろうと考えられる。そんな時期に当て嵌めてみると、ド・ヴィトリやダイイの作品に対する物足りなさから来る、苛立ちの跡を読み取ることも可能であろうが、本論文では作者の個人的な感情よりも、作品に直接表れた工夫を見出すことに留意した。

まず内容面では、王侯や農夫、または旧来の聖職者に比べその台頭が目に見えていたであろう、新興階層である教会参事会員を主人公としてとりあげたことを挙げた。次いで手法面では、語りの視点が先行する作品に比べると登場人物に近く、神の視点に対置されるべきアンチテーズとなって、A、Bの価値観をも疑問に付すに至っていることを述べた。

内容、手法のどちらに於いても、現実と虚構、或いは作品の外と内との関わりのありかたは、ヴィヨンの場合には常に危うい均衡によって保たれている。その意味では、既に見てきたド・ヴィトリやダイイのありかたは非常に安定していて、作品中に示される結論や価値判断に於いては作品の外へ影響を及ぼし得るものの、扱う登場人物は明らかに伝統的な文脈の中で虚構として現れ、語りも虚構の書き割りとしての要素を中心に展開している。こうした伝統的な作品に於いては、虚構は現実と関わりのないものとして造型されている以上、例えば、ゴンチエを他のジャンルの文学作品に登場する農夫と比較することには意味がない。このようにして虚構を現実に対し安定させ得たことと、ド・ヴィトリ、ダイイがそれぞれ司教、枢機脚にまでなった優れた聖職者として安定した身分を保っていたことは、おそらく無関係ではないだろう。しかしそのようなことは、現在の読者にとって、単に時代を表すものと映るに過ぎない。

「返歌」という様式のありかたについて、ダイイとヴィヨンの見解は明らかに異なっている。ダイイにとっては、「元歌」の内容であるフラン・ゴンチエと対照的な主人公を創造することが重要であったのに対し、ヴィヨンの場合には、「元歌」の語りに対置される語りを創出することで「返歌」としている。ヴィヨンの姿勢には、文学作品に語られた内容や価値判断よりも、そこに用いられた手法、ひいては作品に対する作者のありかたそのものを問おうとする、詩人としての我の強さが伺える。しかし同時に、やはり同時代に於いては、「返歌」のありようとしてダイイの採った方法の持つ引力も、依然として強く働いていたのである。我の強さと見えるものは、ダイイの方法から働く引力に対する斥力でもある。ヴィヨン詩が同時代の文学作品との間に保っていた均衡を見てゆく上でも、読者としてのヴィヨンのありようを更に考察することは有効であるように思われる。

注

- 1) *LE TESTAMENT VILLON*, édité par Jean RYCHNER et Albert HENRY, T. L. F., LIBRAIRIE DROZ S. A. GENÈVE 1974, I TEXTE, vv. 1473-1506.
- 2) Jean FAVIER, *FRANÇOIS VILLON*, Fayard, 1982, <Repère chronologique> p. 510.
- 3) Cf. *LE LAIS VILLON*, édité par Jean RYCHNER et Albert HENRY, T. L. F., LIBRAIRIE DROZ S. A. GENÈVE 1977, I TEXTE, v. 43.
- 4) Cf. Jean FAVIER, *op. cit.*, pp. 367-376.
Pierre CHAMPION, *FRANÇOIS VILLON sa vie et son temps*,
Librairie Honoré Champion, 1985 (Réimpression de l'édition de Paris, 1913),
II, CHAPITRE XI (*fin*).
- 佐藤輝夫『増補ヴィヨン詩研究』中央公論社 1972, 第五章第二節 pp. 438-460. 参照。
- 5) Cf. *LE TESTAMENT VILLON*, édité par Jean RYCHNER et Albert HENRY, T. L. F., LIBRAIRIE DROZ S. A. GENÈVE 1974, II COMMENTAIRE, p. 49.
- 6) *LE TESTAMENT VILLON*, I TEXTE, vv. 1473-4.
- 7) Pierre CHAMPION, *op. cit.*, II pp. 60-1.
- 8) 佐藤輝夫, 前掲書 p. 447 参照。
- 9) Arthur PIAGET, <LE CHAPEL DES FLEURS DE LIS PAR PHILIPPE DE VITRI>, in *ROMANIA*, XXVII, 1898, pp. 63-64. *le Dit de Franc Gontier, ou Combien est heureuse la vie de celui qui fait sa demeure aux champs* dans l'édition de 1591.
- 10) *Ibid.*, pp. 64-65. *Combien est miserable la vie du Tyran* dans l'édition de 1591.
- 11) Jean RYCHNER et Albert HENRY, *LE TESTAMENT VILLON*, II COMMENTAIRE, p. 208.
- 12) Cf. Italo SICILIANO, *FRANÇOIS VILLON ET LES THÈMES POÉTIQUES DU MOYEN-ÂGE*, LIBRAIRIE A.-G. NIZET, Paris, pp. 407-17.
- 13) 教会参事会員については、朝倉文市、『修道院』、講談社現代新書、1995、pp. 164-5、p. 169 をおもに参照した。
- 14) Cf. Pierre CHAMPION, *op. cit.*, I CHAPITRE PREMIER.
- 15) *FRANÇOIS VILLON, ŒUVRES*, ÉDITION CRITIQUE AVEC NOTICES ET GLOSSAIRE PAR LOUIS THUASNE, SLATKINE REPRINTS, GENÈVE, 1967. TOME III COMMENTAIRE ET NOTES, p. 392.
- 16) Eustache DESCHAMPS, *ŒUVRES COMPLETES*, S. A. T. F., TOME VII, ball. 1355. *Qu'il n'est au jour d'ui plus seure vie que de chanoingne*, vv. 1-2.
- 17) *Ibid.*, v. 8.

18) *Ibid.*, vv. 9-11.

19) *Ibid.*, vv. 17-20.

20) Cf. *DICIONNAIRE DES LETTRES FRANÇAISES, Le Moyen Age*,

La Pochothèque, FAYARD 1964.

21) バーン／ボニー・ブーロー, 香川禮他訳, 『売春の社会史』, 筑摩書房,
1991, pp. 212-3.

22) David MUS, *LA POETIQUE DE FRANÇOIS VILLON*, Champ Vallon 1992, p.368.

23) Jean RYCHNER et Albert HENRY, *LE TESTAMENT VILLON, II COMMENTAIRE*,
p.208.

24) *DICIONNAIRE DES LETTRES FRANÇAISES, Le Moyen Age*, FAYARD, p.1157.

25) David MUS, *op. cit.*, p.368.

Soubz feuille vert, sur herbe delitable,
Lez ru bruiant et prez clere fontaine,
Trouvay fичee une borde portable.
Ilec mengeoit Gontier o dame Helayne
Fromage frais, laict, burre, fromagee,
Craime, matton, pomme, nois, prune, poire,
Aulx et oignons, escaillongne froyee
Sur crouste bise, au gros sel, pour mieulx boire. 8

Au goumer beurent, et oisillon harpoient
Pour resbaudir et le dur et la drue,
Qui par amours après s'entrebaisoient
Et bouche et nez, polie et bien barbue.
Quant lrent prins le doulx mès de nature,
Tantost Gontier, haiche au col, ou boys entre;
Et dame Helayne si met toute sa cure
A ce buer qui queuvre dos et ventre. 16

J'oy Gontier en abatant son arbre
Dieu mercier de sa vie seüre:
«Ne scay», dit-il, «que sont pilliers de marbre,
«Pommeaux luisans, murs vestus de paincture;
Je n'ay paour de traïson tissue
«Soubz beau semblant, ne qu'empoisonné soye
«En vaisseau d'or. Je n'ay la teste nue
«Devant thirant, ne genoil qui s'i ploye. 24

«Verge d'uissier jamais ne me deboute,
«Car jusques la ne m'esprent convoitise,
«Ambicion, ne lescherie gloute.
«Labour me paist en joieuse franchise;
«Moult j'ame Helayne et elle moy sans faille,
«Et c'est assez. De tombel n'avons cure.»
Lors je dy: «Las! serf de court ne vault maille,
Mais Franc Gontier vault en or jame pure.» 32

Pierre d'AILLI,
Combien est miserable la vie du Tyran

Ung chastel sçay, sur roche espoventable,
En lieu venteux et lez caue perilleuse;
La vy thirant seant a haulte table,
En grant palais, en sale plantureuse,
Avironné de famille pompeuse,
Plaine de fraud, d'envie et de murmure,
Vuide de foy, d'amour, de paix joieuse,
Serve et subgitte par convoiteuse audure. 8

Vins et viandes avoit il sans mesure,
Chars et poissons, occis en mainte guise,
Broués et saulces de diverse taincture,
Et entremès par art fais a devise.
Le mal glouton par tout guette et advise
Pour appetit trouver, et quiert maniere
Comment sa bouche, de lescherie esprise,
Son ventre emplisse com bourse pautonniere. 16

Mais sac a fiens, pulente cimitiere,
Sepulcre a vin, corps bouffi, crasse pance,
Pour tous ses biens en oy n'a lie chiere.
Car ventre saoul en saveur n'a plaisance.
Ne le delicte ris, jeu, chanson ne dance,
Car tant convoicte, tant quiert et tant desire
Qu'en riens qu'il ait n'a vraye souffissance:
Acquerir ceult ou royaume ou empire. 24

Par avarice sent douloureux martire,
Traïson doubte, en nulluy ne se fie,
Cueur a felon, enflé d'orgueil et d'ire,
Triste, pensis, plain de merencolie.
Las! trop mieulx vault de Franc Gontier la vie,
Sobre leesse et nette povreté,
Que poursuivre par orde gloutonnie
Court de thirant, riche maleürté. 32

publiés par A. PIAGET, *ROMANIA XXVII*, 1898, p.63-65.

BALLADE

Sur mol duvet assiz, ung gras chanoine, 1473
Lez ung brasier, in chambre bien natee,
A son costé gisant dame Sidoine,
Blanche, tendre, polye et attintee,
Boire ypocras a jour et a nuytee,
Rire, jouer, mignonner et baiser,
Et nud a nud pour mieulx des corps s'aisier,
Les vy tous deux par ung trou de mortaise.
Lors je congneuz que, pou dueil appaisier,
Il n'est tresor que de vivre a son aise.

Se Franc Gontier et sa compaigne Elayne 1483
Eussent ceste douce vie hantee,
D'oignons, cyvotz, qui causent forte alaine,
N'acoutassent une bise tostee.
Tout leur maton ne toute leur potee
Ne prise ung ail, je le dy sans noisier.
S'ilz se vantent couchier soubz le rosier,
Lequel vault mieulx? Lit costoyé de cheze?
Qu'en dictes vous? Faut il ad ce musier?
Il n'est tresor que de vivre a son aise.

De groz pain bis vivent, d'orge et d'avoyné, 1493
Et boyvent eaue tout au long de l'annee;
Tous les oyseaux de cy en Babiloyne
A tel escot une seulle journee
Ne me tendroient, non une matinee.
Or s'esbate, de par Dieu, Franc Gontier,
Helayne o luy, soubz le bel esglantier;
Se bien leur est, cause n'ay qu'il me poise,
Mais quoy que soit du laboureur mestier,
Il n'est tresor que de vivre a son aise.

Prince, jugiez, pour tost nous accorder! 1503
Quant est de moy, mais qu'a nulz ne desplaise,
Petit enfant j'ay oy recorder:
Il n'est tresor que de vivre a son aise.

LE TESTAMENT VILLON, I. TEXTE,
édité par Jean RYCHNER et Albert HENRY, T.L.F.,
LIBRAIRIE DROZ S.A., GENÈVE 1974. vv.1457-1506.

Les milieux littéraires de <la ballade des Contreditz de Franc Gontier>

Megumi SATOH

<La ballade des Contreditz de Franc Gontier> est considérée comme une des parties qui se sont formées avant la rédaction du *testament* de François VILLON. On peut comparer cette ballade et les deux poèmes précédents; <le dit de Franc Gontier> de Philippe de VITRI et <combien est miserable(*sic*) la vie du Tyran>(autrement dit, <les Contreditz de Franc Gontier>) de Pierre d'AILLI. La ballade de VILLON a des correspondances avec ces poèmes, et présente aussi plusieurs nouveautés. On les trouve dans le contenu du poème et dans le contenant.

En ce qui concerne les sujets décrits par les trois poètes, chacun d'eux propose un personnage typique d'une classe sociale. De VITRI crée le paysan idéal, Franc Gontier, d'AILLI invente le tyran qui s'oppose à Gontier, et VILLON met en scène le chanoine, c'est-à-dire l'ecclésiastique en pleine ascension sociale dans les milieux urbains à la fin du Moyen-Age. Au XVème siècle, les deux poèmes de VITRI et d'AILLI étaient jumelés dans la tradition. Une des tentatives de VILLON consiste à ajouter un autre volet à ce diptyque. Gontier et le tyran sont des protagonistes symbolisés dans la pastorale traditionnelle. Au contraire, le chanoine est décrit d'une manière satirique. On peut remarquer dans la dernière pièce le problème moral ignoré par les autres.

D'autre part, à propos de la manière du style narratif du <contredit>, il y a des différences entre d'AILLI et VILLON. Le premier utilise le même narrateur de VITRI, qui apporte une perspective globale, et parfois, leur vocabulaires s'y superposent. Mais le seconde introduit le point de vue limité de l'individu opposé au narrateur de VITRI. Si la narration adoptée par d'AILLI est celle de la perspective divine, on peut appeler la manière villonienne une narration redescendue sur terre. Dans cette ballade, l'auteur emploie plusieurs métonymies pour évoquer la vie de Gontier et permettre au lecteur de la comparer avec celle du chanoine.

Ainsi, on arrive à mieux comprendre certaines particularités de VILLON. A travers <la ballade des Contreditz>, on peut constater que le milieu des écrivains avait bien changé au XVème siècle.